

くらしナビ

子供の頃、Kくんという友達
がいた。痩せていて、細い目を
した男の子だった。Kくんはひ
どい喘息持ちで、いつも吸引式
の薬を持ち歩いてた。大勢で
遊んでいても、ちょっと走り回
ると「タンマー」としゃがみ込
んで吸引する。それでも発作が
治まらない時は水を飲むと楽に
なるという、遊び場から一番家
に近い友達が走って、コップ一
杯の水を運んでくる。Kくんの
「タンマー」は、せっかく盛り
上がりはじめた遊びを中断せね
ばならなかったし、興が削がれ
た。「またか……」という白け
た空気が流れたこともある。

それでもKくんは、コップの
水をゆっくり飲み干して一呼吸
つくと、「ほな、続きやろ」と、
細い目をもっと細めて泣き笑い
のような顔をして言った。Kく
んはある日突然いなくなつた。
彼の家には「売家」という紙が

プロムナード

心の中に残った。しかし、それ
がなんであるのかはわからな
かつた。

話は変わるが、先日、素敵な
映画館に出合った。東京の田端
の駅からほど近い20席ほどの小
さなスペースだが、目や耳が不
自由な方も一緒に映画を楽しむ
ことができるような工夫が凝ら
されている。すべての椅子に音



声ガイド、本編の音が増幅でき
るイヤホンが完備され、車椅子
席はもろろんの事、上映中に声
を出しても大丈夫なように防音
個室タイプの鑑賞室まである。

上映作にはすべて、日本語字幕
がつけられている。その日、私
が見たのは、ある老夫婦の暮ら
しぶりを追ったドキュメンタリ
ーだったが、会話やナレーション
だけでなく、BGMや環境音
にまで字幕がついていることも

知らないうちに、見聞きした
ものだけをチョイスして映画
を見ていたというところに気づ
き、はっとした。環境音に意識
を集中させてみると、映画の見
え方がかわる。こちらの視点も
深まるのだ。障害者と健常者……
という言葉自体嫌いだ。完全に
健全な人なんて本当にいないの
だろうか、ともに楽しむとい
うことはこういうことなのだ
という気がした。「いたわり」や
「歩み寄り」や「配慮」という
言葉には、健全な者が、障害を
持っている者の地平へ降りて

(木ノ下歌舞伎主宰)

盲導犬の寝顔

張られ、どうやら、あまり幸福
でない引越してあったとい
う噂が流れた。もう、遊んでい
ても、隣で走っているKくんのゼ
ーゼーという呼吸音は聞こえて
くることはなかった。そのかわ
り、何かシコリのようなものが

木ノ下 裕一

新鮮な驚きだった。例えば野外
のシーンでは「へ雨の音」や
「へ風に木の葉が揺れる音」
と普段映画を見ている時には気
が付かない些細な音も文字化さ
れる。

いくつもないイメージが付きま
とろが、実際はそうではない。両
者は同じ時代、社会の中で、つ
まり同じ地平で生きてくるの
だ。障害を持った人と触れあ
うことで、健常者は新しい視点を
得ることだってできる。感性の
豊かさや、別視点の楽しさを交
換することができるのだ。

その間柄には、上下や優劣な
どはない。Kくんが残してくれ
たシコリの正体がわかった気が
した。私たちは「タンマー」の
時間をもっとうまく遊びの中に
組み込むことができたはずだ。
そうすればKくんだってもっと
居心地よく遊べただろうし、よ
り独創的な楽しい遊びになっ
たかもしれない。田端の映画館で
は、通路を挟んで斜め前の床に
盲導犬が心地よさそうに眠って
いた。盲導犬の瞑った目がKく
んの細い目に、少し似ていた。

名作実写 エンタメ

2020年の東京オリンピックを翌
19年。変化する社会と同様に、二
題に事欠かない年になりそうだ。
はどのようなヒット作が生まれ

まず映画で話題を独占しそ
うなのが、ウォルト・ディズ
ニー配給作品群だ。米国では
「アナと雪の女王」の続編や
「スター・ウォーズ/エピソ
ード9 (仮題)」をはじめ、
10作が公開になる。

日本ではこの2作の公開日
は決まっていな
いものの、現段
階だけでもミュ
ージカル映画か
らアメコミま
で、魅力的なラインアップが
出そろっている。

そんな中、ほぼ間違いなく
興収が期待できそうなのが
「トイ・ストーリー4」(7
月12日公開)だ。前作の興収
は108億円。今作でこの記録
を塗り替えられるか。「ダン



日本の漫画が原作の「アリータ：
エンジェル」(20世紀フォックス配
©2018 Twentieth Century Fox
Corporation. All Rights Reser